



はじめに

「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」
(P. ゴーガン、1897年)

人間という存在への問いかけが、今ほど重い意味を帯びた時代はない。野生生物の保全について考えるにあたり、そもそも「人間とは何だろう？」との問いに突きあたる。生物多様性や宇宙全体まで含めて、この世界で私たち人間という存在が何なのか、改めて人間の存在を問い直すことの意味について、皆さんと問題意識を共有したい。

マクロな視点から「人間とは何か」を問う

人間がどういった歩みの中で現在の状況にあるのか、まずマクロな視点から見てみよう。世紀(100年)単位で人類活動の歴史的な変化を見てみると、緩やかでなだらかな増大傾向にあったものが20世紀から21世紀にかけて急拡大し、20世紀だけで人口数だけみても4倍規模になった。21世紀以降もこうした拡大が続けば環境容量と負荷の限界から破局を迎えざるをえない。その意味で現在、人類の歩みは調整局面を迎えている。

かつてアフリカを起源として人類の歩みはゆっくりと地球規模に広がり、マゼランの大航海時代をへて新たな一体化の流れをつよめるに至った。人間はそれぞれの場所で独自の生息環境に適応し、活動域を拡げたが、それによって野生生物の絶滅があちこちで引き起こされてきた。地域の環境を改変しつつ独自の文化が生まれ、対立と融合のなかで人間社会は統合を進めてきた。そして20世紀、人間の活動領域が地球から出て宇宙にまで広がった。これから50年、100年、200年後、人類の歩む道はどこへ、どのように拡がっていくのだろうか。他方、人間の大繁栄の半面で、地球の生物は数多くが絶滅し、生物多様性が劣化している。長い生命の歴史、地球の歴史において5回の大量絶滅が起きているが、現在、巨大化した人間

活動により、かつてない規模での大量絶滅が引き起こしている。

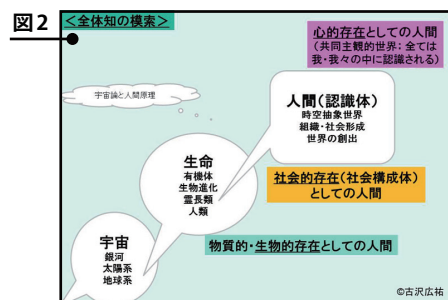
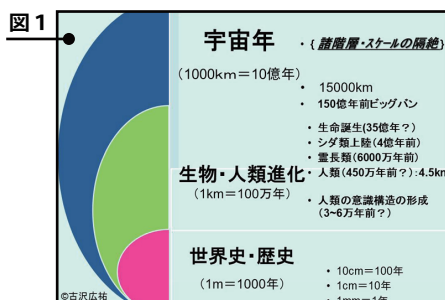
人間活動のスケールは、実動面とともに認識面でも大きく拡張しており、「図1」のように示すと理解しやすい。歴史的なスケールについて、1mmを1年とすると、生活史では10cm規模、世界史でも数10cm位の規模での動きでしかない。一方、哺乳類が地球上で活動してきたのは数km単位の動きとなり、生命誕生、そして宇宙創成からの時間スケールは1,000km規模となる。そこには認識の次元として、大きな階層性の差異があり、巨大な落差が存在している。言い換えれば、私たちの認識する世界は非常に狭い部分でしかないこと、それが相対化されて認識できるようになったということである。

我々が今新しく認識できる世界は、素粒子から宇宙まで含めた世界の全体領域まで広がってきた。その宇宙論そのものの中で、改めて自分たちの存在の位置(認識主体としての「人間原理」の問い)について、根底的に問いかけられている。自分たちの存在を改めて客

観的に認識しつつあるということ、それがいったい私たちにどういう意味をもたらすのか、そのことが重大な問いかけなのだ(図2参照)。

目の前で進行する動き、「繁栄と発展」はとても急速だが、そこでは自分の存在基盤を突き崩していく事態がひき起こされている。一步立ち止まり、自分たちの存在についてきちんと理解しないままにいるならば、人間はこの世界で存続できなくなるということに、私たちは気づけるのかどうか。(まさに、これは寓話としての「スフィンクスの問い」の現代版を想起させる)。

宇宙にはじめてガガーリンが飛んだ1960年代以降、宇宙から地球を見ることで、地球生命圏、宇宙船地球号というような考え方が生まれてきた。そこに見える地球は、人間によって大きく改変されつつある。そして今、人間社会が1990年代以降グローバル世界の大問題として、気候変動や生物多様性の破壊について認識しはじめたことは意義深い。そこでも、「我々とは何か？」が宇宙的スケールで問われている。



人間活動は、手足(道具)の延長、頭脳(情報系)の延長、大地の延長(自然改変)として特徴づけられる。人間とは、時空をまたいで世界を認知し、関与し、改変し、そこに集合的な組織と人為的空間としての人間社会(政治・経済・文化複合体)を作り出してきた。世界に関与し操作することは、自分自身をも操作していくことを意味する。そういう状況の中で我々は進化の道を歩みつつ、自己と世界を見出してきた。その歴史や社会を振り返ると、認知能力を外的関与の力として拡大させ、不安定で不確定な存在を安定化させる道を進んできた。

そこでは、共存という巧妙かつ複雑なあり方を人間社会の内と外において形成してきたのだ。巧妙かつ複雑さの一例として、人間が生物を家畜として囲い込んできた動きをみると、それは一方では自分自身を囲い込んで飼いなしていき自己家畜化現象とでもいうべき矛盾含みの動きをも生じさせている。

人間は自然界ではかなり特殊な位置を占めている。これまで果てしない成長、拡大を順調に続

けてきたかにみえる。しかし、それはどこかでピークを迎えて調整局面に入らざるを得ない。その調整局面として、生物多様性条約(CBD)や気候変動枠組み条約が1992年の地球サミットにおいて成立したのだ。そこから人々の注目が、発展というより持続可能性という論点へと移りだす。枯渇性資源から再生可能な資源への移行や、人間が自分たちの活動を自己調整してまわりの環境と調和していけるかが問われ出したのだ。

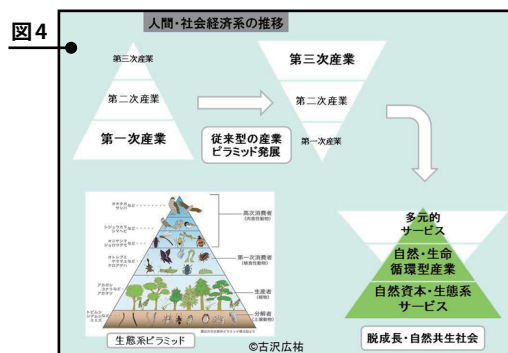
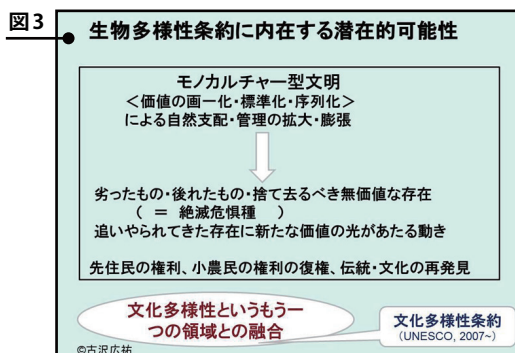
とくにCBDは、人間が単一の価値基準で自然を支配コントロールしようとする動き(モノカルチャー化)に対して警鐘を鳴らしている。発展や開発の過程で、他の生物や先住民の文化など、捨て去り、追いやってきたものの中にこそ、実は大変重要な価値があること、人間が自然と共存する上で考慮すべき在り方についての気づきであり、警鐘である。改めて共存の在り方を再認識するきっかけとして、CBDはきわめて重要な契機なのだ(図3参照)。

他方では、従来の自然支配と管

理によるテクノロジー拡大型の力は勢いをより強めつつある。遺伝子組み換え生物、最近では合成生物学が隆盛して、生命そのものに対する操作が加速化している。また地球の気候を操作するジオエンジニアリング(地球工学)も生まれている。こうした動きに対する枠をはめていくのがCBDの重要な役割なのだが、現在その実効性はきわめて弱い立場でしかない。

自然と人間の関係を生態ピラミッドの概念でみると、人間はそれを大きく歪めてきた。この歪みの問題を、自然の側から再認識することが重要であり、そこから改めて人間の発展の在り方そのものが見直されてくる。人間社会は、逆三角形の産業構造を形成してきたのだが、従来の3次産業化する世界に対して1次産業(農林水産業)を軸に再構築することが求められている(図4参照)。以前に愛知ターゲット3報告書(No.2)^{*}で示した、人と自然との共生の例としての社会ビジョン「里山ルネッサンス」的な世界への道が拓けるかどうか、私たちは大きな岐路に立っている。

(^{*}<http://www.jwcs.org/data/Target3TWCSNo2.pdf>)



まとめ

いま人間自身を問うべき時を迎えている。巨大な力を持つに至った人間の力を、相対化する手がかりとして「野生」というキーワードがあるのではなからうか。物質・エネルギーから人間社会、生物界、地球、宇宙の大構造を認知する一方で、最近話題になったドローンの利用などロボット技術の発展はめざましい。未来学者の間では、人工知能の能力が2040—50年頃には人間を超えるだろうと言われ出している。私たちは、「汝自身を知る」ことが果たしてできるのだろうか。